
俺の婚約者がアンドロイドだった件について

マドハンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の婚約者がアンドロイドだった件について

【Nコード】

N9449X

【作者名】

マドハンド

【あらすじ】

親父がアメリカから送ってきた婚約者はアンドロイドだった
おい、親父。俺はまだ人形に逃げるほど落ち潰れちゃいねえぞ！？

『彼らはマサトと午前です。早く起きてください』

「ん……」

合成された声に特有の棒読みの言葉で、俺は目を覚ました。

ゆつくりと瞼を開くと、俺の視界におそろしいほど整った顔立ちをした碧眼の女性が映る。窓から射し込む日の光を反射して、その女性の長い銀髪がキラキラと輝く様に、俺は目をすばめた。

まさに、紛う事なき絶世の美少女。

だが、その顔は無表情で固められ、愛嬌というものが欠片もない。その無機質さを感じさせる棒読みの音声によって、彼女が人間ではないことを俺に思い知らせた。

『それが初期に生じなければ、マサトは学校に遅れるでしょう』

「……うるさいな。分かってるよ」

俺は俺の顔を覗き込むように見つめていたその女性を、払いのけるようにして起き上がる。

俺と彼女は、もう三年ほど同じ家に二人で暮らしていた。

そうなったきっかけは、今から四年前。海外で研究を続けている親父から俺の誕生日に連絡があった時だった。

その時の親父の言葉は、「何でも欲しい物をやるから、言うてみる」

電話越しにその言葉を聞いた時、当時は中学生特有の強い性欲を帯びていた時期だったため、俺はスケベ心満載で女を要求した

のだ。

だがそこは中学生。初心だった俺は直球で女の体だけを要求するのは恥ずかしく思い、変化球で婚約者が欲しいと口走っていた。

そこで返ってきた親父の言葉は「少し時間がかかるから待っている」

俺は期待に胸を膨らませて待ち続けた。

だが、俺の要求を何をどう解釈したのか、それから一年後に送られてきたのはとイヴいう名のアンドロイド。

感情がないだけでなく、入力されている言語に日本語がなかったため、喋る言葉は英語を日本語にエキサイト翻訳したものという有様の一品。

動きや外見は人間と遜色なかったが、俺は妙なプライドを刺激されて絶対に手は出さなかった。

初めてを感情のない人形で散らすとか悲しすぎる。そう思うのは自分がまだ高校生だから故だろうか。

しかし、親父が変なところに気を利かせたのか、そのアンドロイドには変な機能が備わっていたりする。

俺が学校の制服に着替えて居間に顔を出すと、イヴは裸に白いエプロンという格好で待ちかまえていた。

イヴの体は細部に至るまで忠実に人間に模されて作られている。その肌は触れば柔らかいし、温もりも感じ取れるほどだ。

だから、その人間の女性と何ら変わらないイヴの体に、俺は動揺した。その艶やかで白い肌と、エプロン上からでも分かる豊満な胸に、思わず生唾を呑み込んでしまう。

『それはどうですか？　それが起動されましたか？』

だが、俺の股間を見ながら放たれるイヴのその言葉に、俺は冷静

になった。

そう、どうやらイヴには俺の性欲処理を手伝うようプログラムされているようだった。この家に来て約三ヶ月ほど経ってから唐突に起動したそのプログラムは、俺を毎日のように猛烈に誘惑してくる。寝込みだつて何度襲われたことやら。だが、今のところ俺はけなしの理性でそれを全て跳ね返していた。

今回のそれも、俺は強がりの入った言葉で応じて見せる。

「はっ、誰が人形の裸なんかで興奮するかよ」

『実際に？ それは遺憾です。その人が非常に興奮した時、裸エプロンはネットワークに適しました』

「……」

正直、何言ってるか分からない。

まあ感情がないイヴの言葉なぞ、最低限のことが理解できればいいとは思っているが。

そこでふと、俺はいつもの朝と違うものに気が付いた。

居間に置いてある、食卓の上。

そこに、作りたての朝食が用意されていたのだ。

「……これ、お前が作ったのか？」

『はい、それは、私はマサトを嬉しくさせると思い、激しく作りました』

「……」

どうやら、イヴが作ったので間違いないようだ。

メニューは白ご飯に、肉じゃがと味噌汁。あとは焼き魚に卵焼きと朝食にしては少々量が多めになっている。

だが、見た目は非常に美味しそうであり、俺の食欲をそそった。イヴにはこんな機能もあつたのかと感心しながら、俺は食卓の椅子に座る。

「いただきます」

手を合わせてから、早速その卵焼きから一口食べてみた。ジワツと舌の上に染み渡る味に、俺は一瞬、意識が飛びそうになる。

たった一口分で息も絶え絶えになりながら、俺はイヴに質問してみた。

「おまえ……これに何入れた？」

『タンパク質、オロナミンCおよび後部はウンカーを置きます。私は、それが元気づく場合、それは私に道楽半分に手を出すかもしれないと思います』

「何を言ってるのか全然分かんねえ……」

だが、タンパク質やらオロナミンCという単語が飛び出した時点で、まともな物を入れていないのは予想がつく。

まさか言語機能だけでなく料理機能にも欠陥があるのだろうか？

俺がその料理のあまりの不味さに頭を抱えていると、イヴは唐突にテレビを点けてエプロンを脱いだ。

完全に露わになった裸体に、俺は思わず慌ててしまう。

「イ、イヴ？ 一体なにを？」

俺のその質問にイヴが答える前に、テレビにビデオが再生された。一昔前に流行ったビーズブート。ヤンプという短期集中型エク

ササイズの実践が画面に流れ、イヴがそれに合わせて体を動かし始める。

「古っ！　っていうかアンドロイドがエクササイズって意味あるのか！？　電気を無駄に消費するだけじゃね！？」

『継続的な努力がその考えの男性の魅力を実行するように要求された時、それは婦人雑誌にありました。エクササイズがさらにその部分である場合』

「ああああ何言ってるか全然分かんねええええええええええ」

そう思わず叫んでしまうと、イヴはエクササイズの動きは止めないままに、無表情の顔を俺に向けた。

『明日送られたソフトウェアがインストールされている場合、日本人が話すことができます。それまで耐えてください』

なんとなく、その言葉は理解できた。

親父が嘘を言っていなければ、だいたい明日頃に届くはずなのだ。イヴがちゃんとした日本語を喋れるようになるソフトが。

「はっ、別にどうでもいいよ。お前の喋ることが分かったところで何も変わらねえしな」

俺はそう呟いて、イヴにしかめっ面を見せた。

雅人が学校に登校してしまった後、イヴはずっと一点を見つめて佇んでいた。

イヴの視線の先にあるのは、食卓の上に置いてある空になっている皿。

まずいまずいと連呼しながらもしつかり全てを平らげられているそれ見て、イヴは独りでにポツリポツリと呟く。

『我??』

『?? ?? ?? ?? ?? ??』

『Ich liebe Sie』

『Lo amo』

『Eu o senhor amo』

『I love you』

一つ一つ、丁寧に紡がれる言葉。

イヴは机の皿から視線を外し、明日という日に二重丸が印されているカレンダーへと視線を移した。その印をしたのは雅人である。

それを見たイヴの口元が、ほんの僅かに微笑みを形作った。

もしかしたら、明日が最後の――

（後書き）

おまけの翻訳元

雅人さん、朝です。早く起きて下さい。

はやく起きないと学校に遅れますよ。

どうですか？ 興奮しましたか？

そうですね・・・それは残念です。裸エプロンは、男の人が凄く興奮するとネットにあつたのですが

はい、雅人さんに喜んでもらおうと思って一生懸命作りました
プロテインとオロナミンC、あとはユニケルを入れてみました。元気が出れば私に手を出してくれるかもしれないと思いついて

意中の男性を魅力するには絶え間ない努力が必要だと女性誌にありました。エクササイズもその一環だと

明日送られてくるソフトをインストールすれば、日本語が喋れるようになります。それまで我慢して下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9449x/>

俺の婚約者がアンドロイドだった件について

2011年11月16日13時49分発行